大阪朝日新聞
昭和十一年二月二十七日
第三名古屋號外
（昭和十一年一月廿五日第三種郵便物認可）
編輯印刷兼發行人　寺澤鎭
發行所　名古屋市中區廣小路通二丁目十一番地　大阪朝日新聞名古屋支社

戒嚴令下の帝都警備

高橋前藏相逝去す

【大藏省發表】高橋大藏大臣は二月二十六日不慮の災禍により重傷を負はれ同日遂に薨去せられたり

寫眞說明

❶警視廳附近（拓務省前から二十六日午後）
❷警視廳正面玄關（二十七日朝）
❸急派された〇〇聯隊、軍旗を先頭に堂々入京（廿六日夜）
❹內務省附近の警戒（廿六日）

此の號外は本紙に再錄しません

寫眞說明

❶赤坂附近の警備❷足をとられた出勤時の日比谷❸着京の〇〇聯隊❹日比谷における市民❺警備に就く陸戰隊＝いづれも二十六日撮影

大阪朝日新聞

昭和十一年三月廿二日
名古屋號外

（昭和十年十一月廿五日第三種郵便物認可）
編輯印刷兼發行人　寺澤鑛
發行所　名古屋市中區廣小路通二丁目十一番地　大阪朝日新聞名古屋支社

二・二六事件　帝都の四日間

二月廿六日午前五時！折柄雪催ひの暗澹たる雲低く垂れこめた帝都に稀有の一大叛亂事件が勃發し空前の騷擾は全市民を震撼せしめ全國民に一大衝撃を與へた、すなはち既報の如く一部青年將校および元將校ら廿餘名を中心とする近衞歩兵第三、歩兵第一、第三、市川野戰重砲兵第七各聯隊の武裝下士兵千三百數十名が數隊に分れ首相官邸、齋藤内大臣私邸、高橋大藏大臣私邸、渡邊教育總監私邸、鈴木侍從長官邸などを一齊に襲撃し瞬時にして時の内府齋藤實子、藏相高橋是清氏、教育總監渡邊錠太郎大將および岡田首相の身代り松尾傳藏大佐（首相の義弟）警官四名を殺害し、また別動隊は神奈川縣下湯河原伊藤屋旅館に避寒中の前内府牧野伸顯伯を襲ひ警官一名を射殺の上放火した、血盟團、五・一五、神兵隊等々とすでに數次の集團的大官暗殺事件に血の洗禮を受けてゐる市民も、この餘りにも大きい事件に一時慄然としたが遂に戒嚴令施行となり、その間鎮定まで四日間、帝都は一時全市の交通停止、株式取引所の立會停止など深刻な事態を惹起した、當時戒嚴司令部ならびに内務當局では事件の性質上當局發表以外その他極く小部分を除くほか一切事件の報道を禁じてゐたが、時局の漸次鎭靜とゝもに二十二日午前九時更に差止事項の改訂により事件の報道が緩和されるに至り以下掲載を許されたものである

この號外は本紙に再録しません

岡田さんは斯くして救はれた！

首相「撃て！」と一喝　思ひきや助けの神
難關は松尾大佐の遺骸　運を委せた二大芝居

首相官邸の襲撃によつて岡田首相が射殺されたといふことは當時何人も疑はなかつた、二十六日事件直後の當局發表も「岡田首相即死」となつてをり國民は擧げて痛惜の念にかられた、しかるに二月二十九日夕刻内閣から「岡田首相は生存す」と發表した時、國民はこの奇蹟的生存に等しくその目、その耳を疑つた、どうしてあの不意の襲撃を免れたか、どうして叛軍重圍の中を脱出したか、脱出までの一晝夜をどうして無事に過したのか……これは日本國中の大きな謎となつたばかりでなく世界的の注目を集め某外國新聞は賞金附きでその特ダネを入手しようとさへしたといはれてゐる、しかしてその眞相の一部は三月五日夜福田祕書官から發表されたが、謎は謎を生み種々な流説さへ生れたがその詳細な徑路は次の如くである

三人が一心同體
互に激勵し叱り合つて　殊勳を樹てた憲兵

岡田前首相救ひ出しに殊勳を立てた三憲兵は當時をかう語つてゐる

自分達はたゞ分隊長の命令に從つて行つただけです、しかし自分達だつてすでに命は投げ出してかゝつた仕事だから、あれだけ大膽にやれたのです、最初派遣された七人も互に氣持はピッタリ合つてゐましたのも幸ひでしたが、これが三人になつてからといふものは全く一心同體で互に勵まし合ひ、叱り合つて遂に目的を達することが出來た

なほ小坂慶助曹長は東京北多摩郡國分寺町出身、相澤中佐事件に功を現はした人、青柳利之軍曹は長野縣東筑摩郡洗馬村の出身、犬養首相遭難に際し檢視員となつた又小倉双一伍長は樺太大泊出身

突差に全館消燈
散り行く武人の最期

麴町永田町首相官邸に騷ぎの起つたのは午前五時を一寸過ぎたころだつた、日本間奥の中庭に面した電話室附近に犬養元首相遭難後取付けた非常報知のサイレンが屋内の寂寞を破つて氣味惡くうなり出したので松尾傳藏大佐と二人の女中さんが一樣に飛び起きて廊下に出た、「何ごと？」三人の足は期せずして日本間玄關に走り出した途端、その方向から物凄い物音が傳はつて來た 鋼鐵の防火壁がその物音の度に震へてゐるのだ、玄關脇の寢室に寢てゐた村上、土井兩警官も飛び出て來た、「いけないッ」と直覺した松尾大佐は突差の氣轉から直に全館の電燈を消し岡田首相の寢室に驅けつけた、響きわたる物音に漸く目醒めたらしい岡田首相を蒲團の中から引起すやうにしながら「大變です、大變です」と急を告げると首相もどうやら事態が判つたらしく「どうしたのだ」と反問する

早口に大佐が事情を述べると首相は「それでは俺達はもう駄目ではないか、そんなに慌てゝも仕樣がない」と却つて落着き出す有樣に一同躍起となり、兩警官が後方を護り松尾大佐が先に立ち二人の女中があとを護つて押し出すやうに鍵の手に曲つた廊下を台所の方に向ふ折柄、玄關の物音はすでに止んで消された電燈が一つ／＼奥に向つて點けられはじめた「この光景ほど氣味の惡いものはなかつたと思ふ」と後程岡田氏は身邊の人達に洩したといふ、二人の女中は驚いて角の松尾大佐の寢室に飛び込み、

殘りの一團は後ずさりの體で板戸を開け洗面所の前まで來たが、事態はもう急迫した、今はこれまでと土井巡査は片手で首相を洗面所の中に突き飛ばし、首相が尻餅をついて起き上らうとすると板戸の前から二警官のうなり聲が聞える、それにつゞいて中庭の方角から松尾大佐の「ウウーン」と大きくうめく聲、さらにその前の部屋にゐる二人の女中の耳には「天皇陛下萬歲」と二度まで叫ぶ聲がハッキリ聞きとられた、間もなく違ふ聲が口々に「これだ／＼」などと罵り騷ぎ出し、それらの聲は總理の寢室に移つて行つた、首相は茫然としわれ知らず洗面所を出て行かうとすると板戸の前にうめいてゐた土井巡査が首だけ上げ「大臣出てはいけない、いけない」と咬みつくやうに怒鳴つたので我れに還りまた引つ込むとやがて騷ぎは急に鎭まつてあたりはまた元の靜けさにかへつた

首相は暗然端坐　息詰る押入の中
突如荒々しく開かる

それを待ち切れぬものゝ如く首相は洗面所を出てまづ板戸の前の二警官に默禮し寢室に引返して自分の寢床の上に横へられた松尾大佐に兩手をついて禮を捧げた、事はこれで終つたのだと思ひ込み首相は取敢ず簞笥から衣服を取出し袴の前をしめ後板を上げようとしてゐると再び荒荒しい物音が聞え出したので、急いで元の隱れ場所に引返して樣子を窺ひ、漸く松尾大佐の寢室に赴いた

そこには二人の女中が死んだやうに大佐の寢具の上にうつぶしてゐるので首相は暗然として一隅に端坐してゐると三度不氣味な足音が聞えて來た、このときまで死んだやうになつてゐた二女中は突然起き上り「旦那樣どうか隱れて下さい」と押入れの中に首相を押し入れた、足音の主は憲兵と今一人で「こゝはお前達だけか」と開く、女中「さうです」「押入れの中に誰れかゐるではないか」息詰るやうな瞬間押入の襖は荒々しくあけられた

岡田「撃てッ！」

憲兵がすかさず「それは俺れに任せろッ」睨み合ひの狀態はしかし意外にも好轉した、憲兵の言葉とそれを聞いた人の心とがピッタリ合つたのだつた、かくて首相はその瞬間から「生きる」といふことを眞劍に考へる氣持となつた

兩祕書と三憲兵　首相脱出を密議
案出した燒香の筋書

官邸奥の一隅でかゝる深刻な場面が展開されてゐるとは露知らぬ外部の人々は首相の安否を氣遣つてヤキモキするが、官邸には唯一歩も近寄ることは出來ない、すぐ脇の官舍にゐる福田、迫水兩祕書官すら入ることは許されないのだ

しかし兩氏とも決して諦めなかつた、何とかして線香の一本も供へたいと懇願に懇願を重ねた末二十六日午後漸く二人は福田家にあつた一束の線香を持つて入邸を許された

しかも驚いたことには二人を案内するのは唯一人の憲兵だけなのだ、やがて首相の寢室に導かれ顏にかけられた白布をはぐと何たることぞ！松尾大佐その人ではないか！迫水祕書官などは危ふく口まで出るのを危ふく喚ひ止め胸の動悸を抑へてゐると憲兵の聲あり「これは間違ひなく總理ですか」見れば足許には首相の居間に掲げられてあつた夏服姿の首相の寫眞が額縁から取はづされて投げ出されてゐる、顏あらためをやつたのだ……

福「間違ひありません」死を決した聲だつた、ところが憲兵は一向氣にかける樣子もなく福田祕書官一人を捉へ無言で別室へと合圖する、默々とこれについて入つたのは松尾大佐の寢室であつた、しかもそこで福田氏はいま松尾大佐の死體を見て驚いた以上の驚きに直面したのだ

生きてゐる岡田首相!!

次の瞬間福田氏の度胸は不思議と据つて來た「なんとか助け出さう」と取敢ず松尾大佐の遺骸の方に蹴り掛け布團をすつぽり頭から被せて顏を隱し、一まづ外に出たそれから二祕書官の新しい惱みが始まつた、額を付き合せて方法といふ方法を考へて見た、勿論そのころはまだ外部との聯絡はとれてゐない

結局二十六日はいかにしても手を出すことは不可能だつた、夜に入つてせめて食事でも差入れたいと「女中に辨當をやりたいから許して下さい」と交渉したところ、向ふでは「襲らなんでも女中に飯を食はさぬやうな不憫な眞似はせぬ」とのことに當惑したがとにかくと白根翰長方の子供の辨當箱にサンドウイッチと日本食とを詰め再び行つて見ると「こちらで渡してやる」との返事に二祕書官はガッカリしてしまつた、心勞の二十六日は暮れて二十七日の午前福田祕書官の許に憲兵が三人やつて來た頭だつた一人が福田氏に對し「憲兵は人を救けるのが目的なのだから」といふその言葉の裏以心傳心とでもいふか福田氏は總てを諒解し

こゝに首相脱出の大芝居を三憲兵と祕書官の二人で決行しようと心に定めまづ變裝用にもとマスクを一個、官邸内の總理に手渡すやうに頼んだ、このころ外部の岡田家親戚や海軍將校の間でなんとか首相の遺骸だけは安全なところに引取りたいといふ議が强くなり海軍の有志から白根翰長のところへ電話で通じて來た、これを知つた二祕書官は今はもう躊躇してゐるべき場合ではないと三憲兵と話合ひこゝに決定されたのが岡田家の近親者の燒香にかこつけ首相を連れ出さうとの筋書だつた

僞裝腦貧血

かくて岡田家へは「二十七日午後二時頃から特に官邸内で燒香を許すが、なるべく老人の方に願ひたい、女はお斷りする」といふ奇妙な知らせがあり親戚總代として元鐵道勅任技師加賀山學氏ほか十一人の老人連を引連れ午後一時過ぎ福田祕書官の官舍に一まづ落着いた、しかしこの時この十二人は勿論裏面に左樣な祕密があり、自分達が左樣な重大な役割をつとめることゝは夢にも知らないので一同他人の見る目にも悄然としてゐる

一行は福田氏および憲兵を先頭に官邸に入らうとすると歩哨が一々人數を勘定し始めたではないか、先頭の二人ははつと色を失つたが今は引くにも引かれない、マヽよと中に入つた、屋内は二十六日朝のまゝだ雨戸が閉ぢられたまゝで薄暗く目的の寢室には淡い電燈が一つともつてゐるばかり

福「燒香は次の居間で願ひます」と一同を枕元に近付けず、十二人が居間に入りきつたところで入口のふすまを締切り、福田氏と憲兵は直に岡田首相の待つてゐる松尾大佐の部屋に入り用意のモーニングに着換へさせ、マスク、ロイド眼鏡で變裝させた三憲兵の一人はこの時玄關の歩哨に「どうも困つてしまふよ、餘りひどいところを見せたので腦貧血を起した奴がゐる、車を一台中に入れてくれ」と交渉しマンマと門外の自動車をピツタリ日本間の玄關に横づけにさせ何喰はぬ顏で首相を導きさつさと乘車させてしまつた、玄關附近に控へてゐた三、四名の兵が氣がつかなかつたのがむしろ不思議な位に危機を通り拔け、福田氏の同車した自動車は一路特許局横を右折してアメリカ大使館前に出た、それから程なく淀橋區下落合三ノ一一四六元代議士佐々木久二氏宅にこの車が着いたのを誰一人として知るものがなかつた

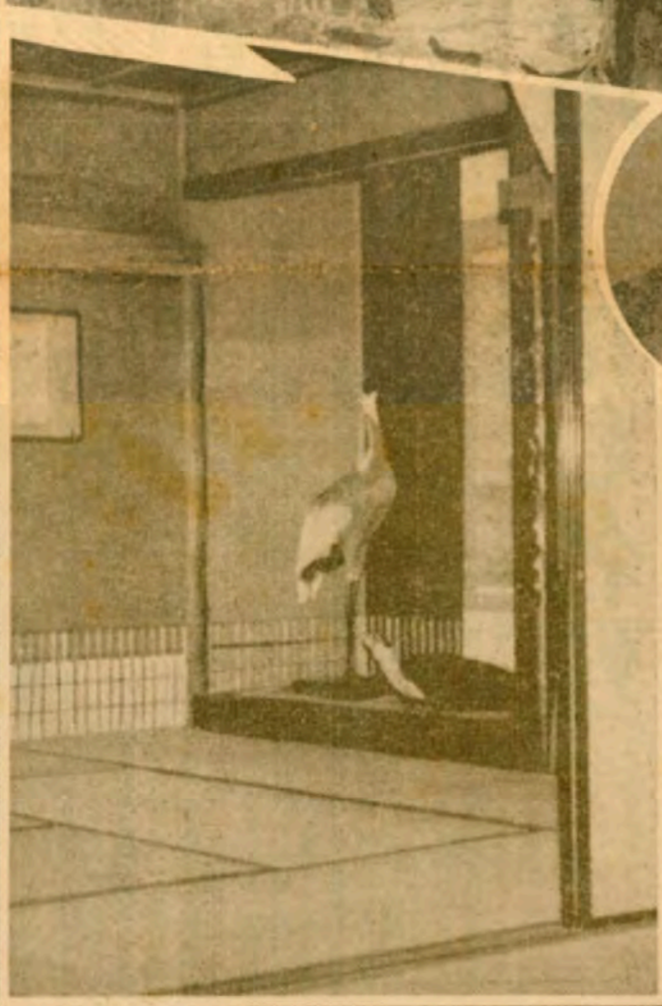
遺骸搬出で爭論
最後の關所は檢視

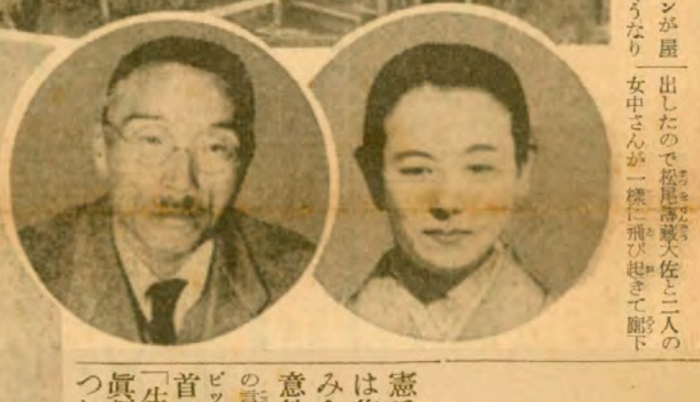
一方あとに殘された十二人の燒香者は誰一人死顏すらみられないので「岡田さんは首がないのではないか」といふものも出てその一人が憲兵の隙をみて枕元に近付き布團をのけてみ「死んでしまふと隨分變るものだなあ」と驚いたが、それでも「首相は即死」とのみ思ひ込んでゐる人々は疑つてみようともせず却つて今まで一緒だつた福田祕書官の姿が見えないのに不審を抱いたくらゐのことで、その場も無事に切拔けることが出來、首相脱出の一幕は終つた

ところで關係者に取つてはまだ安心ならぬことが一つあるのを發見した、それは松尾大佐の死體の始末のことである、福田祕書官はをらず、迫水祕書官が一人案じてゐる時遅ればせながら燒香にと大久保祕書官と鈴木對滿事務局祕書がやつて來た、迫水氏は今はもう殘すところなく總理脱出の一部始終を二人に話したところ、二人も驚き且つ喜び直に松尾氏の死體處分の議に加はつた「出すべきか」「出さぬがよいか」議論百出、また内閣方面からも岡田氏脱出と聞いて「松尾の死體は殘して置け」といふ者さへ出たが鈴木氏が頑張り「何時あの死體が松尾大佐と判るかも知れぬ、犯人が證據を殘して置くやうなものだ」と遂に搬出に決し再びこの點の交渉がはじめられ、折良く來合せた元岡田大將副官平出海軍中佐（軍令部出仕）も努力して承諾を得た

しかし困つたことには平出中佐はまだ死體を首相のものと信じてゐる、そこで迫水氏が危險の眞只中にありながら眞相を打明け同日午後五時半いよ／＼搬出の運びとなつた

一切の人々を遠ざけ迫水、大久保、鈴木、平出の四氏が寢室に入り素早くかけてあつた白毛布に死體をくるみ納棺してしまつた、かくて一同玆に堵列默送の禮を捧げる中を身代り大佐の遺骸はあくまで總理の如く取扱はれながら靜々と官邸を出た、鈴木氏は御丁寧に「首相の遺骸は確かに引取りました」と禮まで述べ第二の大芝居も滯りなく幕とはなつたが、最後に引つかゝつたのは檢視の問題であつた、いまだ棺を開けられては大變と特に内務省、警視廳首腦部と打合せ檢事局四谷署からの申込みも一切斷り、四日目の二十九日午後九時海軍省醫務局長の手によつて檢視が濟まされたのであつた、從つてそれまで何も知らぬ親戚の人々は松尾大佐の柩の上に岡田首相の寫眞を掲げ「至誠院殿啓道大居士」の位牌まで飾られたものであつた





【上】岡田前首相の隱れた佐々木邸＝❶萬一を慮り佐々木氏が用意しておいた室 ❷前首相の居室 ❸前首相と岩佐憲兵司令官が會見した應接間 ❹前首相の寢室【下】居室の内部＝床の間の鶴龜は岡田さんの贈りもの【圓内】佐々木氏夫妻

A-74

〝一兵も血ぬるまい〟親ごころ

手を替へ品を變へ 兵に歸順勸告の苦心

兵舍を思はせるラッパ等 鎭定に誠意を碎く

一兵も血ぬらずしていかにして叛軍を鎭定すべきか、戒嚴當局の苦心は實にこゝにあつたので事件勃發以來二十九日叛軍の鎭定に至るまで當局はあらゆる方法と手段に全く努力の限りをつくしたもので、或夜の引き明けるころなどは叛軍の目の前に「軍旗に手むかふな」の字を現はしたアドバルーンを揚げて叛軍に見せたり、また二十九日拂曉の如き「まだ遲くはない、原隊に歸れ」のビラを一枚でも多く叛軍の兵士に手渡すことにつとめるほか、更にビラ三萬枚を飛行機によつて叛軍の上空から撒布したが、より徹底せしめるため戰車を利用してその外側には「われは射たない」と大書して叛軍の神經をたかめることなく車中から歸順勸告ビラをくまなく撒きちらしたのである、その他三個の擴聲機を設置して彼の香椎戒嚴司令官の名諭告「兵に告ぐ」を三方より叛軍の兵に呼びかけ、時には兵舍を思はせるラッパを擴聲機を通じて送り、叛軍が所屬してゐた師團長、各隊長が「部下が可愛ければこそ」の愛情を胸一杯にして叛亂軍の兵を說くことに全力をつくし第一師團長の如きは一兵に對してまでわざわざ車を降りて手をとつて、事の順逆を說き歸順をすゝめるなど洵に涙ぐましいものでこれらの誠心誠意が漸く功を奏し平和裡に鎭定し得たものであると各方面から非常に感謝されてゐる

留置解除の兵ら 決死・近く滿洲へ

汚名そゝぐ熱烈な意氣

さる十九日今次の事件に叛亂軍として行動した兵千三百二十數名は一應の取調べを終了留置を解かれてそれぞれ原所屬隊に復歸し今では一般の普通兵とともに營內において起居してゐる、近く第一師團では滿洲派遣隊として重大な任務に直面してゐる これらの兵士に各所屬隊では直に教育に着手、すでに一部の者は重要な任務に服して一般兵と同樣の取扱ひを受けてゐる、殊にこれら留置を解除された兵達は今更ながら自分達のとつた行動が全く誤つたことを痛感し渡滿の曉には一死をもつて今次の汚名をそゝぎ眞に皇軍の一員たるの實を示さうと熱烈な意氣を示し各自任務にいそしんでゐる

大本教退治から 急轉帝都治安へ

京都で特高課長會議中に飛報 內務省の緊急對策

二・二六事件突發の際は內務省警保局では例の大本教退治に關する全國特高課長會議を京都府廳で開催中であつた、二十五日の會議第一日を終へて都ホテルへ投宿中の唐澤警保局長へ帝都に重大事件發生の第一報が屆いたのは二十六日午前五時半ころであつた、五・一五事件以來の世情 永田事件、渡邊教育總監暗殺計畫事件、相澤中佐の公判その他から相當に神經を尖らして治安維持に專念してゐた矢先だけに唐澤氏はピンと來たらしく直に會議を中止し即時全國特高課長へ歸任を命じた

一方直ちに全國各府縣知事へ事件を通報するやうに命じて自分は朝七時半の超特急で東上、居殘つた永野、赤羽兩內務事務官は府縣知事および植民地長官へ遭難の大官氏名および騷擾は帝都の一部で一般は平靜なる旨の長電を發して治安の維持を嚴達した

これより先二十五日夜の都ホテルにおける特高課長の懇談會に出席した內務省の相川保安課長は唐澤氏と一緒に廿六日夜出發することにし寢台券なども買つてゐたのに宴半ばに突然「あすの會議は視察が主だしそれに局長と僕が二人こちらにゐて內務省を明けて置くのも氣にかゝる」と寢台券の買換へを命じて 急遽 二十五日夜十一時過ぎ京都發急行で東上したが、これは矢張り職掌柄事件突發を豫感したのだらう

×

事件發生と同時に內務省は包圍されたので二十六日以來大臣官房以下警保局一部は巡查教習所、衞生局は濟生會、社會、土木兩局は協調會館、地方局は局長官舍、唐澤氏以下警保局員は下谷上野署へそれぞれ假本部を設け警視廳と密接なる聯絡をとつて帝都治安、避難者の 救護 に萬全を期し一方全國府縣ならびに植民地へ毎日三回乃至四回にわたつて帝都の狀況を長文の電報で報告し全國の治安確保に全力を注いだ

〝勅命下る、軍旗に手向ふな〟 歸順を促がすために中空高く上げられたアドバルーン

新議事堂の玄關を破壞

叛軍の重要な足溜

未完成ながらも雄大な永田町の新議事堂の建物は首相官邸とともに叛軍の重要な溜りの一つとなつた 二十六日永田町一帶の交通遮斷を行つた時からもちろんこの無人の未完成建物も叛軍の支配下に置かれたもので、議事堂前の廣場はいつも兵士らの休息地となり、殊に二十七日正午ごろからは警視廳をはじめ大半の叛軍がこゝに集結されて焚火をして暖をとり輪になつて談笑するなど大變な賑やかさであつた、夜に入りこゝの叛軍は殆ど山王ホテル、幸樂に分割移動してしまつた

二十八日中にもまた相當多數の叛軍が侵入し玄關を破壞、內部にまで入り窓ガラス、扉に損傷を與へた、その損害は約三千圓に上つた、更に二十九日歸順の際叛軍の一部はこの建物を枕に自刃するかとも見られたがそのこともなく新議事堂史の第一ページを血ぬらすにはいたらなかつた

雪中に惜む名殘 悲壯を極めた三日目

料亭「幸樂」での叛軍四日間

二十六日午前十時ごろ前夜から降りつゞく雪の中を麴町區永田町二丁目の料亭幸樂の玄關に一台の幌型自動車が横づけされ首相官邸へ辨當と酒をとゞけて貰ひたいと注文して立去つた、この雪空に大よろこびの同料亭では女中百餘名と男衆八十餘名が大童になつて用意を整へ午後二時と同四時の二回にトラックでとゞけたが 官邸 は「萬歲、萬歲」と大騷ぎだつたといふ、二十七日同料亭ではラヂオではじめて大事件を知つたが、夜七時ごろ宿舍に貸してくれといふ電話があり、間もなく叛亂軍がドヤドヤと乘込んで來た、その中の一人は興奮した若いものだが風儀その他に迷惑をかけるやうなことは絕對にない、食事はすべて宴會式にやつて貰ひたいと申出でた、門內廣場には炭火が山の如くにおこされ裏門は鍵をかけ正門玄關もいちいち誰何するといふ嚴重な警戒ぶり、その中に入浴するもの、食事をするもの、手紙を書くもの、キャラメル、煎餅を注文する者などがあり、二十八日午前一時ころ一同は 眠り についた 二十八日も朝から雪、八時ころ一同起床、交替で朝食を終りその中の數人は別室に集まつて協議を進めてゐたが、前日にひきかへ總てが嚴格となり電話も家人の出入にも嚴重を極めた、午後三時ころ一同は玄關前廣場に集まり悲壯な場面を展開したといはれる、その後日本酒の用意が命ぜられ白木綿の襷がけで雪の中に放歌亂舞盡きるところを知らず、夕刻六時ごろにいたつて大部分は引揚げた、殘つた數名が街の人々に一場の演說を行つたのもその後のことであつた

同料亭では「二十九日の朝食には是非頭付のものを出して貰ひたい」と注文を受けたが仕入れようがなく普通のまゝ準備を進めてゐるうちに同夜 深更 十二時ころになつて背廣服の人數名が訪れ「新議事堂の者は食事をしてゐないので即時屆けよ」とポケットから八十圓出したが出來ないといふと中の一人は二十圓持つて外に出てゆき間もなく三俵の米を持つて歸つて來たのでこれを引受けた、そのうちに「この場所は不利であるから引揚げることにした」とて二十九日の午前二時ごろ一同は引揚げてしまつたので同亭ではやつと安堵の胸をなで下し二十七日以來はじめて床に就いたといふ

夜が明けて同料亭前にマイクが備へられ、例の「今からでも遲くはない……」の「兵に告ぐ」ラヂオが放送されたが、そのときはすでにみな料亭から姿を消してゐたさうである、同家の四日間における經費は約六千圓近くといはれる

幸樂の女將

菓子箱を見て「爆彈か」で大笑ひ

幸樂の女將かたる

幸樂の女將佐藤らくさん（[illegible]）は語る

大勢の宿泊でその炊事は全く大變でした、丸三日間は家族全部が一睡もしませんでした、殊に食料品は手分けして遠く八方から苦心して集めたものです、今から考へますと腹立たしくもあり、また笑止にも考へられることは二十七日の夜一人でも人手の欲しいあの際に使用してゐた支那人のコック十餘名が混雜中にいつの間にか各自の荷物を取纏めて行方不明となつたことです、それに二十八日の夜求めにより菓子類を箱に入れて持込んだ時に電話で今のは爆彈ではないかとの問合せに一同苦笑したものです、二十九日立退き命令が出た時、室內至るところに火がカンカンおきてゐるのを心配してゐましたが、和さん（[illegible]）で通つてゐる火の番が一人止まつて火氣に注意してゐてくれたことは本當に感謝してゐます

兵隊さん達は泣いて出て行つた

その時を語る 山王ホテル女給

未曾有の事件勃發の翌二十七日の夕刻から混亂に陷つた赤坂山王ホテルの職場で最後まで職責を盡した可憐な女性がゐたことが今度はじめて明かにされた、同ホテル食堂の女給仕伊藤葉子さん（[illegible]）がそれだ

葉子さんは新潟縣西頸城郡能生町貧五郎さんの長女、昨年九月山王ホテルの食堂に雇はれたがもつて生れた性格は非常な男勝り、二十七日の宵からホテルは漸く混亂の渦中におかれてしまつたが、葉子さんはともすれば立ち騷ぐ同僚を制して元氣に立ち働き食堂の大場主任もその沈着さには感動させられたといふ

混亂治つたホテルに葉子さんを訪ねると食堂の隅から小柄な身體を現はした、なるほど見るからにガッチリした娘さんだ、葉子さんはボツリボツリその當時を語る

二十七日の晩からあんなことになりまして最初のうちは何がなんだかハッキリ判らなかつたのです、廿八日は朝から一緒に働いてゐる人たちとお握りを澤山つくりました、私たちがをりました台所の方にはざつと二、三十人の人がゐますし肉切り台の上には恐いものが乘つかつてゐますし、玄關でも屋上でもどこでも薄氣味惡い空氣が流れてときどきどうなるかといふ氣持ちで一杯でしたの、でもその日はまた一日食堂でお握りで暮しました、その晩十時過ぎ從業員もみんな歸り私もお友達とともにかく寄宿へ歸りましたが恰度一時過ぎでした、下の方でみんな立退きの支度をはじめ私もうつらうつらしてましたが五時ごろになつて私はとうとうホテルに歸つて來たのです、ホテルの樣子が判らなくて困るだらうしそれにいろいろと職場のことも氣にかゝりますので……そのときホテルの人はたつた四人、直ぐありつたけのお米を炊いて約四百人分のお握りにとりかゝりましたが人々は新築の方の廣間に陣取つて大きな聲で順番に歌を唄つてゐました、なんの歌でも唄つてよいといつてゐたやうです、人々はいよいよ歸る「思ひが通らなくて歸らなければならない」とみんな泣き、皆さんは私に「ぜひ名前だけは聞かしてくれないか」とせがみ、その中の一人は「色々迷惑をかけて濟まなかつたが君から皆さんに宜しくいつてくれ……」とお握りで一杯の私の手に握手してゆきました、私がホテルを出たのは恰度午後一時ごろでした

勇敢な女給さん 山王ホテルに最後まで止つた伊藤葉子さん

華族會館にも

事件第二日の二十七日午後一時ごろ警視廳內を引揚げた叛軍は麴町區三年町一の華族會館に現はれた恰も二階で第四木曜例會のため鷹司、島津兩公爵、細川、中御門兩侯爵、林、川村、二荒各伯爵、裏松、安藤、青木各子爵、稻田、安場、松平、永松、深尾、岩倉各男爵らが會食中であつたが在室者を點呼したりして事務員に白のテーブル掛けを出させ幅五尺、縱二間半のものに大書し、これを同館屋上避雷針に揭げた後會館內の人々に外出を許した

意外！玄關先に〝死んだ〟岡田首相

隱れ家でも高朗の豪膽さ 匿ひ主・佐々木氏の話

危機を脫した岡田前首相が心身共に疲れた身體を憩ふた淀橋區下落合三の一一四六元代議士佐々木久二氏邸は賑やかな目白通りを三、四町西南へ入つた邸宅街、福田祕書官から「今晩御厄介になりたい」と電話があつたのは二十七日の夕刻、間もなく重責を帶びた佐々木家運轉手笠井重孝君（[illegible]）の車が音もなく邸內に辷り込む、內玄關から上つた福田祕書官は佐々木氏に抱き付くや 力強い 聲で「總理は助かつた」と叫んで後を指し示した、射殺されたと信じてゐたのに餘りの意外さに愕然とした佐々木氏が振りかへると、そこにはモーニングに鼠の中折、ロイド眼鏡にマスクをかけ變裝した岡田前首相が元氣で立つてゐるのだ、佐々木氏は無言のまゝ裏手二階十疊の日本間に案內したが、思はず前首相の手を握つて嬉しさの餘り涙したといふ

岡田前首相は「樣々の人の御好意により助かつた、一刻も早く參內してお詫を申上げたい」と言葉短かに感慨を漏らし祕書官に宮中に在る後藤臨時首相代理との打合せを命じた、まんじりともせず打合せを待ち二十八日參內と定まつてその夜やつと佐々木氏の着物に着更へた前首相は佐々木氏夫人清香さん（[illegible]）が 心盡し の輕い日本食で夕食を攝り入浴してさつぱりすると膝を正して「宸襟を惱まし奉つて恐懼に堪へない」と額を下げながら佐々木氏に死線突破の話をしたが「高橋さんは私が殺したやうなもので申譯ない」と歎き三憲兵の行爲、福田祕書官の度胸、笠井運轉手の沈勇を賞讚したといふ

折角重圍を脫出した前首相の寢室には絕對安全な別棟二階奧八疊の日本間をあて、福田祕書官はその隣室に十時過ぎ就寢したが微かな鼾が寢室から十間餘も離れた茶の間の佐々木氏の耳に入り流石は軍人と岡田さんの豪膽さに舌を卷いたさうである、脫出第一夜は 明けて 二十八日早朝五時いつもの通り目醒めた前首相は七時半「よく眠れていゝ氣持ちでした」と離床、訪れた吉田調査局長官に辭職の手續きを依賴、吉田氏が去るとずうッと裏手二階で福田祕書官と話してゐた

夕刻六時半橋本臨時首相代理祕書官と岩佐東京憲兵司令官が訪れ階下應接間で會見したがそのときモーニングに 威儀を 正した岡田前首相は直立不動、司令官に向ひ「かういふ事件を起し申譯ありません、一度陛下に拜謁を賜はりお詫を言上したいばかりに恥を忍んで生き永らへてゐました」と熱涙と共に挨拶した上 貴官の部下の獻身的努力で助かつた、是非表彰願ひたいと付け加へたさうで、一方司令官は 私は重大責任がありながら職務を全うし得ず、私こそ申譯ありません と司令官も涙を呑んださうであるこの會見後前首相は司令官の車に同乘、それに橋本、福田兩祕書官の車が續き宮中へ參內したものである、佐々木久二氏（[illegible]）は當時の模樣につき感慨無量の態で左の通り語つた

運び出されたのは松尾大佐と思つた 感慨無量な佐々木さん

二十七日岡田さんの私邸へお悔みに行つてゐるところへ福田君から電話があり、「行動隊と交涉の結果、親戚の者には燒香が許されることになつたから成るべく年老つた男ばかり十一、二名來て頂きたい」と言つてきたが私も燒香したいと思ひ十一時過ぎ岡田家の人々とともに私の車とタクシー二台に分乘、度度誰何されながら首相祕書官官舍に辿りつきました、福田君はこれから燒香を願ふが福田一生のお願ひだからと改まつて

一、いかなることがあつても聲を出さないこと

一、佛に手を觸れないこと

一、五分間以內に立ち去ること

一、歸りの自動車は一任して下さること

の四項目を出しました 變だと 思ひながら福田君と憲兵の案內で徒步で官邸に入りました、私らが事變勃發以來最初の入邸者でしたが大變荒されてゐました、日本間を通り拔け中の座敷から奧の日本間に横はつてゐる佛を拜んだのですが、靈前には机と線香だけでした、變に思つたのは 佛に掛 けられた一枚の布團が人の横はつてゐるとは見えぬくらゐ水平で枕が露出してゐることでした、もう一つ腑に落ちなかつたのはいつの間にか襖が閉められてあり外に出ると裏口に廻しておいた私の車が無いのです、弔問客の一人が急病に罹り福田君が送つて行つたといひましてね……ですからこのときは松尾大佐が負傷してその機會に運び出されたくらゐに思つたわけですが……仕方がないから私だけ溜池まで步き円タクで芝田村町の會社に行き夕方歸宅したわけです、ところが間もなく福田君から電話があり、意外にも死んだと思つてゐた岡田さんが元氣な姿を現したのです、私は先刻燒香したのが岡田さんと信じてゐたので實際驚きましたよ、こゝで數々の疑問も解けたわけですが、岡田さんは階段を上るにも お疲れ の樣子で氣の毒でした、福田君から、脫出した私の車の中で煙草を貰はれたと聞きなんとなしに涙が出ました、多くの書生や女中に知らさないやうにと參內までには隱れ場を用意して苦勞しました

嚴戒の隙を狙ひ 祕かに食糧運び

寢もやらず一夜を匿つた 沈着な二人の女中さん

九死に一生を得た岡田前首相とともに總理官邸日本間にあつて約一日半生死を共にした女中頭秋本さくさん（[illegible]）、女中府川きぬえさん（[illegible]）の二人は身を挺して主人を護つた想ひ出を次ぎのやうに語つた

騷々しい音で目を覺まして事件を知りたゞ震へてゐました、旦那樣（岡田前首相）は奧まつた一室に難を避けられ松尾さんは庭先で悲慘な最期を遂げられました

大部分の人は 官邸の方へ引揚げたらしいがどうすることも出來ずに寄り添つて泣いてゐますと早く立退くやうにと嚴命されました、しかし御主人の安否を知る迄はと頑張つてゐたところへ官舍にゐた迫水、福田兩祕書官が見え松尾さんの遺骸を御覽になつた後、監視の人と一緒に女中部屋に御廻りになつて「危ないから早く出たらどうだ」といふお話でしたが御主人を脫出させるまでは居殘るといふ心の中の決心を知らせるために「御遺骸のあるうちは立ち去れません」ときつぱり斷りました、兩祕書官は私達の氣持を察せられたか意味ありげにうなづき「相談して見よう」と答へて去られました

恐しい一日が 暮れかかるころに小坂曹長ほか二人の憲兵の方が警戒に派遣されました、御主人（岡田前首相）は殺されたことになつてゐましたので

隙を狙つては御主人のところへ食糧を運ぶことが出來ましたところが御主人の御休みになつてゐるところから大いびきが聞えて來ました、隨分お疲れになつてお寢みになつてゐるから無理もありませんがもしこれを聞きつけたら大變と二人は交互にグウグウ狸寢入のいびきを合せて一所懸命にかいて誤魔化しました、人が近づいて聞かれさうになるとわざわざ廊下を步いたりして紛らしたり隨分苦勞しました、かうして

二十七日の朝 になりましたが祕書官官舍からの弔問客を御主人のもとまで運び時を待つうち晝頃になりますと十數人の弔問客を連れた迫水祕書官が見えて松尾さんの遺骸に皆の注意を向けさせてゐる間に福田祕書官は私服の御主人をモーニングに着換へさせマスク、眼鏡をかけて變裝させた上小坂憲兵曹長と協力して小倉憲兵伍長が用意してお連れした車で御主人の自動車までお連れしました樣子でした、私達は數時間の後、松尾さんの遺骸と一緒に角筈のお邸へ歸りましたがなんともいへぬ悲壯な氣持で泣いてばかりをりました

騷ぎも一應治 まり相變らず親切な御主人樣と一緒に暮せるのは神樣の御護りといふほかありません

府川さんは小田原高女を出て卒業後行儀見習ひに來て三年目であるが秋元さんは十二年も勤めてゐる家附の女中さんである

勇敢な府川きぬえさん

四功臣・襲撃されたその刹那

夫人何れも動ぜず 身を以て夫君を庇ふ

沈着さを世人嘆稱

遭難した齋藤前内府の本葬儀は既報の通り兒玉秀雄伯を委員長に二十二日午前十時半から築地本願寺に執行、午後一時から二時まで一般告別式が執行される、また高橋家では山本達雄男を委員長に來る二十六日正午赤坂表町の自邸を出棺、零時半から同様築地本願寺で本葬を執行、二時から三時まで一般告別式に移り兩功臣は向ひ合つて東郷元帥の墓標のほとりに永眠することになつてゐる、更に杉並區上荻窪の渡邊錠太郎大將邸は遭難の翌々日二十八日近親ばかりで密葬を行つたがそのゝち弔問の人の姿も絶えて今ではすゞ子未亡人を中心に遺族の人人が香煙の中に故大將の冥福を祈つてゐるが陸軍當局では何れ戒嚴令が解かれてから陸軍、參謀本部、教育總監部合同の「陸軍葬」の禮をもつて厚く本葬儀を營むことになる模樣である、なほ同樣不意な災禍に遭ひながらも九死に一生を得た鈴木侍從長はその後麴町九段の官舍で鹽田博士以下の手當を受け經過も良好で毎日御下賜のスープに感激してゐる、この四功臣の夫人はいづれも遭難の朝を眼のあたりにして夫君のため身をもつて庇つたその沈着な行爲がいま噂になつてゐる

〝何をするのかッ〟 老藏相、大聲叱咤す

赤坂表町三ノ一〇前高橋藏相私邸は午前六時五分襲撃され、警戒中の玉置巡査は負傷して倒れ他の警戒員も同樣威嚇監視されてしまつた、恰度邸內では書生が電話で急報中であつたが受話器を叩き落された、高橋翁は二階十疊の間に就床してゐたが藏相は氣丈夫にも「何をするツ」と呻くが如くとがめ間もなく絶命した、かくして大潮の引くがやうに叛亂軍は引揚げて行つたがその間僅か六、七分間の出來事であつた

寧ろ卑怯です 正視し得なかつた後始末 未亡人の口惜し涙

こゝは故高橋前藏相が生前しな子夫人とともに食事を攝つた高橋邸の思ひ出の部屋、しな子未亡人は『今は氣が張つてをりますが……』と悲しい想ひ出を涙とともに語り出した……

二月二十六日、恰度あの日は午前中に宮中へ獻上する書を揮毫する

豫定に なつてをりました、十五、六歳の少女がゐると縁起がよいと申すので十五になる孫（是昭子令孃正さん）にすらせることに決つてをりました、その日の早朝あゝいふことになりませうとは……

その前夜は本當に機嫌よくニコニコしてゐましたが私は左足が不自由ですからお先きに失禮して別棟の

三階の 部屋へ引とりましたが、それが最後のお別れとなつてしまひました

その朝恰度夜明けの五時ごろでございましたら、邸の裏の方でゴトゴトと音が聞えました早起きの下男が庭掃除をしてゐるものと氣にも止めませんでをりますと間もなく私の臥せつてゐる三階の下をダダーと走る音が聞えると間もなく突然ポンポンと變な音が三つ、おや？と思ふ間もなく室内電話がけたゝましく鳴つて『旦那さまが

お倒れ になりました』と女中から聞いたとき

高橋前藏相としな子未亡人

〝射つなら射て〟と 鈴木侍從長仁王立ち

麴町區三番町二侍從長鈴木貫太郎大將の官邸が襲はれたのは午前五時十分ころだつた、叛軍は女中を起し「侍從長はどこにゐる！」と質した、大聲に眼を覺ました侍從長はかねて覺悟をしてゐたので寢室に隣る納戸に驅け込み、しまつてあつた日本刀を探したがどうしても見付からないので廊下に出ると叛軍と眞正面に出會はした、この時侍從長は大聲で「靜かにしろ」ときめつけ、「俺が鈴木だ」と、その瞬間決意するところあり「射つなら射て……」と兩手を擴げ胸を張つて仁王立ちになつた、傷ついて侍從長は倒れたが何れも急所を外れ辛くも助かつた

交通を絶たれて燃えるに委かす 「近づくとやつつけるぞ」 戰慄・牧野伯襲擊

襲撃を受けた牧野伸顯伯の宿舍、神奈川縣湯河原伊藤屋別館光風莊前の撞球場吾妻屋主人杉本辰次さんは二十六日朝の出來事を回想して語る

光風莊の入口で扉を壞すやうな物音がするので起きてみると「あッ」といつたきり口のふさがらぬやうな光景なので茫然として見てゐるといきなり「近づくとやつつけるぞ！」とエライ劍幕で怒鳴られ吃驚して家に逃げ込みました、間もなく光風莊の中で激しい音がし、もういけないと思ひました……さうかうするうち突然どこからか火の手が揚つたので延燒されてはたまらぬと心配しましたが何分交通を遮斷されてゐるのでどうにもならず電話をかける聲が聞えてもやられるといふ有樣なので弱りました、消防がやつて來てヤレ嬉しやと思つてゐるとこれまた消火の動作がとれず拱手傍觀を餘儀なくされるといふ始末で一體どうなることかと思ひました

傷つきながら危急を救ふ 殊勳の附添看護婦

右の二の腕に負傷しながらも湯河原溫泉で牧野伯の急を救つた附添看護婦森鈴枝さん（二三）は東京市小石川區白山前町看護婦會明石なら方から派出になつた人で事件後湯河原同春病院に收容されその後伊豆屋旅館に移つて傷の治療を續けてゐる、二十一日朝同女は語る

全くあの朝のことは夢のやうでございます、妙な音がするので目を覺ますと「閣下々々」と叫ぶ聲がするのでたゞ事でない氣配を察し廊下を急いで飛んで行き御主人をお連れして裏口から庭に出ましたがもうその時は火事騷ぎだつたのです、生れてあのやうな恐ろしい思ひをしましたのは初めてです

牧野伯を救つた看護婦森鈴枝さん

更に茶亭へ 三君に伴はれ

警護の皆川巡査の必死の防戰で辛くも裏山に逃れた牧野伯夫妻は出火に驚いて驅けつけた裏山工事場人夫生駒林次（二〇）竹內賢一（二〇）の兩君が背負ひ令孫は同角谷一重君（二〇）に助けられて山上の茶亭に避難したが生駒、竹內、角谷の三君は交々語る

あの日午前五時四十分ごろ焚火をしながら一服してゐると突然パチ〳〵豆をいるやうな音がしたので青訓生の演習でもはじまつたのかと思ひましたが忽ち物凄い火の手が上つたので轉げるやうに裏山をかけ下りると牧野伯夫妻が着のみ着のまゝで愛孫達と逃げて來たので安全な山上の茶亭にお伴れ申したわけです＝寫眞右生駒君、左角谷君

安全地帶に移してひと安心 山上の茶亭老夫婦

無事に安全地帶に移した山上の茶亭の齋藤良藏（六五）せき（六〇）老夫婦は

牧野さんは溫袍、奧方は寢卷のまゝ驅け込んでいらつしやいましたがすぐに電氣を消して騷ぎの鎭まるのを待ち襟卷や帽子、ショール、溫袍などを差上げ支度を整へ申上げ間もなく自動車を呼んでお出かけになりましたと語つた

彈丸も遂に盡き 渡邊教育總監も仆る

二十六日午前六時ごろ杉並區上荻窪二ノ一二陸軍教育總監渡邊錠太郎大將邸は襲撃された、警戒中の二憲兵は二階に就寢してゐたが飛び起きて防止した、この物音に勝手にあつた夫人は奧十疊の間に就寢中の渡邊大將に「大變ですよ」と聲をかけた

その時大將とゝもに就寢中の令孃和子さん（一〇）は氣丈夫にも隣室の襖のところに立つて樣子を見てゐたが夫人のところに飛び出して來て父大將に急を告げる積りかまた父の寢てゐる寢室に歸つて行つた

大將はこの時かねて用意のピストルを寢室の押入から取出し令孃和子さんを壁に立てかけてあつたテーブルの蔭に屈で踏み倒すやうにして押込み防戰したが彈丸つきて遂に仆れた

渡邊大將未亡人

侵入者の面前に立塞がつて叱責 亡き大將を語る渡邊夫人

叛亂事件の起つた廿六日早朝東京杉並區荻窪、陸軍教育總監渡邊錠太郎大將邸ではすゞ子夫人（五三）が既に起床してお勝手で支度してゐた、そこへあの騷ぎである、夫人は侵入者を前に立ちふさがつて「何をするのです」と叱り飛ばした、夫をかばつた沈着な態度は流石武人の妻の龜鑑と讚へられてゐる沈着な夫人であるが「家庭の大將」の横顏をつゝましく語つた

大變に乘馬が好きで運動といへば乘馬でした、水月、靜文の二頭を持つてをりますが水月の方をとりわけ好きのやうで毎朝出勤前に天氣さへよければ三十分から一時間は乘馬で、役所から歸りますと暇を見ては讀書をしてゐました、また時々書も書きました、それもみな「書いてほしい」といはれたもので戰死者の方の墓碑や忠魂碑なども大分書いたと思ひます、勝負ごとは「負けるのがいやだ」といつてちつともやりませんでした、お酒などもおつき合ひ程度でいたゞきませんでした……、それから若い時分は大變に射擊が自慢で家の中の遊びでも物を射つことは百發百中でしたし、明治四十年から三年間ドイツに留學しましたときもピストルの標的射擊が一番でその標的を授與されて來てたゞ今でも玄關にかけてあります

家庭の渡邊大將は「よいお父さま」の一言でつきる溫厚さ、そしてまた沈着な大將だつたなほ家族は長女の政子さん（二四）は隣家に居住久保篤德醫學博士の夫人だし、長男誠一君（二〇）は武藏高等學校尋常科三年、次男恭二君（一四）は武藏野學園五年生末つ子の和子さん（一〇）は成蹊學園の三年生である

僅かに呻き絶命 內府夫人も防ぎ傷く

午前五時五分ごろ四谷區仲町三ノ四四內大臣子爵齋藤實氏私邸は襲擊された、就寢中の女中は非常鳴をあげて奧に避難した、このたゞならぬ物音に二階十疊の間に就寢中の內大臣夫妻は驚き廊下に出て外を窺つてゐると叛亂軍に襲はれたので春子夫人は內府を部屋に押しもどし固く襖を閉ささんとしたが力およばず齋藤子はかすかに「ウム」とうめきながら片隅の寢台わきにひよろ〳〵とよろめき歩いて行つた、夫人は狂氣の如くになつて防止しようとしたが却つて負傷しその場に倒れて了つた、かくて侵入時より約十分ののち家人の混亂する中を叛亂軍は引揚げた

夫人が必死に押へる 襖を破つて侵入 內府の最期 嗣子は語る

齋藤內大臣の嗣子齋藤齊氏（隣家に住んでゐる）は語る

何か知ら物音に眼をさましたので二階の窓から外を覗いてみると暗い中に門の扉が開かれ銃劍兵が大分ゐるので何か起つたなと思つた間もなく兵隊は整列して出て來たので急いで本宅にかけつけ二階の父の寢室にかけ上つて行くと寢台の傍に右手を寢台においてうつ伏せに倒れ部屋の中は一杯の血だつた、後で聞いたのだが二階に兵が上つて來る物音に母が起きて部屋の襖を開けると兵がゐるので急いで閉めた、その時父は起き母の後に立つてゐたさうで母が襖を押へてゐるのをまた押しあけられたそのときに父はピストルで射たれヨロ〳〵とよろめいて寢台の傍に行つて倒れたのださうだ

齋藤齊氏

ははつとして女中に助けられながら母屋の寢室へ參りました、そのときはもうこときれてをりましたが布團の外へ踏み出してゐた片足を布團の中へお入れしたときはまだ溫く額も溫かかつたのですが電話で河野醫師がかけつけられたときはもう

致し方 なかつたのです

あの日來た人たちは二十二、三名、警官を門前で押へ、小門から入り內玄關を壞して家探ししたので硝子も障子も滅茶々々でした、家人を二階には一歩もあげず引揚げるまで僅かに五分間ぐらゐで主人の身體は私どもには殆ど正視し得ぬ位で後で醫師が手當したときは女は一切入室を禁ぜられたほどでした、殘虐と申すより卑怯と存じ殘念でございます

拳銃四發 令孃眞喜さんの話

高橋是清氏令孃で水間盛三郎氏夫人眞喜さんの話——警官の方の『大變だ、大變だ、起きて下さい』といふ聲で起き出して玄關に出て

急いで 表町署に電話をかけて廊下に出て見ると兵隊は『電氣をつけろ』と怒鳴つてゐました、逃出して階段の下に出ると私を取りまいて『女でも抵抗すれば殺すぞ』といふので動けなくなつてゐるとそのうち二階で『何をするのかッ』といふ聲が聞えたかと思ふと四發のピストルの音が聞えましたが侵入者が去つたので二階に飛んで上りますと枕許の

豆電氣 がついてゐて朱に染つてお父樣がこときれてゐたのです

奧女中が一人父の隣室に寢てゐたのですがドスン〳〵といふ音が聞えたので父に『何かあるんぢやないでせうか』といふと『屋根から雪が落ちる音だらう』と父はいつたさうです、ドヤドヤと兵隊が侵入して來たので驚いて二階に驅け上ると後から兵隊がついて上つたといふことです

同じ寢室にて奇蹟の命拾ひ 愛孃和子さん

故渡邊大將と寢室を共にしながら奇蹟的に傷一つ負はなかつた末子の和子さん（一〇）は、大將が眼に入れても痛くないほど可愛がつてゐたいはゆる「お父さん子」だつたこの奇蹟的命拾ひにつき、お母さんのすゞ子夫人はかう語つてゐる

あの騷ぎの時和子は父と一緒の部屋に寢てをりましたが、私が『お父さま大變ですよ』といひますと、和子は起き出して私の傍に參りましたが、またお父さまが心配になつたものかいきなり部屋の中に飛び込んで行きました、お父さまもまた和子を傷つけさせてはと思つたのでせう、立てかけてあつたテーブルの蔭に踏みつけるやうにして隱れさせました、お父さまは和子を大變に可愛がつてゐましたし和子もまた〳〵でなんでもお父さま、お父さまでなければいけないし、お父さまも和子相手によく遊んでやつてゐました、騷ぎが治まると和子はテーブルの蔭から出て來てワッと泣き出したのですが……娘も私も不思議にも無事でした

奇蹟的に助かつた和子さん

〝職に斃れるは……是清不動の信念〟 望月前遞相の思ひ出話 高橋翁生前の心境

不慮の死をとげた前藏相の高橋是清翁はかやうな事態についでは豫想しなかつたらうが、「死」を覺悟、悲壯な決意で

老齡 を押つて台閣に列し邦家のため盡してゐた老翁の秘められた心境が翁と交遊の深かつた望月前遞相によつて、葬儀を前にした十八日「あまり私は語してゐないことだが……」とはじめて明かにされた、以下望月前遞相の話——

床次君が逝去してその後で私に就任するやう岡田前首相と高橋前藏相から手厚い勸告を受けた御大典に當り內務大臣として取締の重責を果してから內閣の出來る度に話を受けたが國務大臣にならなくても御奉公は他につくす道があるとの主張を持して來てゐた、それで高橋さんのお勸めも辭退したのだが高橋さんがその時非常に

熱心 にいはれたので私は「あなたは私に對してお勸めになりますが聞くところによればあなたのお家族や眤懇な方達があなたは老齡でもあり身體も餘り丈夫でない故に餘生を安樂に送られたらよからうといはれてゐるさうですがあなたの御心境はどうなのですか、あなたは今後どうなさるのです」と尋ねた、——すると高橋さんは「それは私に對して家族の者や眤懇の人達から度々餘生が短いから安らかに送れといはれてゐる、しかし私は餘生が長ければ休養をしてまた國家に盡せるが私は

餘生 が短いからこの場合に盡さなかつたら國家に何の貢獻もなすところがない、餘生は短かければ短かい程盡す時はないではないかといつてゐるのだ——私は犬養內閣成立とゝもに藏相として即時金輸出禁止を斷行した、それでその不景氣を受けた國民の所得の增收をはからなければと晝夜その點について苦慮を重ねた、五・一五事件で犬養內閣から齋藤內閣に代つた、同時に又大藏大臣について交渉があつた、私は前の不景氣打開の考を實行して行かなければならぬのでその時も辭めよといふ者があつたのだが私が入閣して微力を致した積りだ、それから齋藤內閣が辭職し岡田內閣が成立した時藤井君が藏相になつたが不幸にして早逝してまた岡田首相の懇々たる依賴があつた、何もこの老齡を以つてして好んでこの職についてどうかういふことはないが國家非常時の上から微力を盡さなければならぬと思ふからこれも受けた、世間では何か私の大臣の地位につくことを好んでゐるとか、どうかういふ非難もあつたと聞くが國家に盡したい一念から藤井君のあとを受けたそれで

今日 におよんでゐるが私について種々のことをいふ人がある——改まつてあなた（望月氏）が私の心境を聞きたいといふのだから率直にいへば「岡田君が辭職してくれといふなら辭めるが私としてはこの職で斃れるといふ是清不動の信念があるのです」……といはれたことを今回の高橋さんの不慮の逝去に當つて半年前の高橋さんの言葉を考へると生死を國家に捧げてをられたといふ信念がまざ〳〵と胸に浮んで來て實に感慨無量のものがあるのだ

宮內省から急報 園公靜岡へ避難 興津坐漁莊を脫出

二十六日早朝宮內省からの電話で叛亂事件を知つた興津坐漁莊の西園寺公は直に避難の手はずを決めたところへたま〳〵京都から訪問して來た祕書中川小十郎氏と女中頭あやさんを伴ひ警衛主任吉村警部の護衛をうけて自動車ナンバーをつけかへ和服に二重廻し姿で來車靜岡市の某所に向つた、一方留守邸は八十餘名の武裝警官が警戒にあたつた

この日午前十時相澤中佐の辯護人鵜澤總明博士が訪問し園公不在のため熊谷執事に相澤中佐公判の經過を報告し會談一時間で辭去した（清水）

宮內省退出の園公（右方は原田祕書）

大臣官邸が宿舍 小學校でも叛軍休養

麴町區外櫻田町內相官邸は二十六日警視廳の襲撃後午前六時二十分ごろ襲はれ警戒中の巡査三名は詰所に監禁され、また邸內にあつた書記その他は奧六疊の間にとぢこめられたが同夜七時すぎ叛軍は引揚げて行つた

▽……△

文相官邸へは二十七日夜七時半ごろ警視廳を引揚げた叛軍が乘込み脫靴の上屋內で休養し歸順の日までこゝを宿舍とした

▽……△

藏相官邸も同日同時刻に華族會館から引揚げて來た叛軍來り二十九日までの宿舍となつた、また鐵相官邸も同時刻ごろ叛軍が押しかけ歸順の朝まで滯留した、農相官邸には二十七日午後二時ごろ叛軍の一名來り各室を檢分のゝち同六時ごろ叛軍が來り一般應接室、婦人應接室を使用、二十九日正午ごろまで滯在した、その間邸內の白米二斗、米櫃一、自轉車一台が紛失した

▽……△

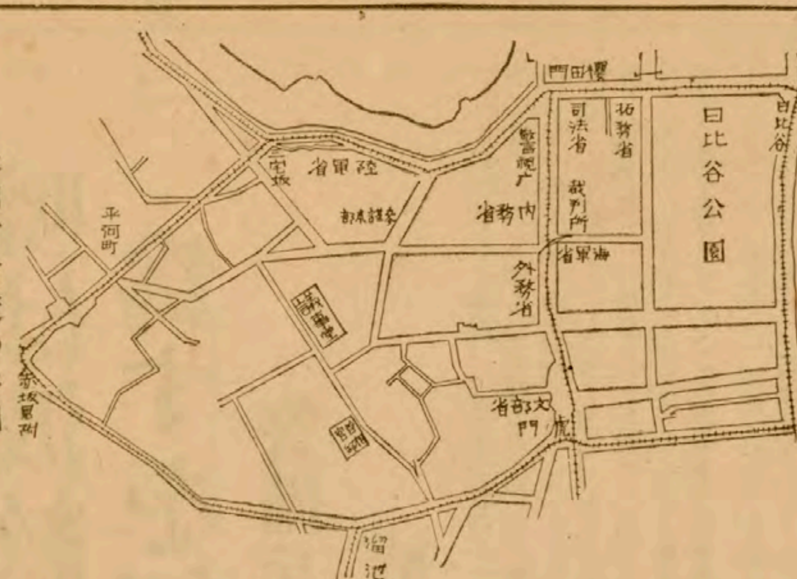
永平クラブ（永田町一ノ一）二十七日午後三時ごろ叛軍が宿舍として借用方を申込み一室に上つて休養、二十八日夕刻は酒を飲み軍歌を高唱するなど氣勢をあげてゐたが二十九日早朝引揚げた△永田小學校、二十八日午後四時ごろ叛軍が來校、宿所の提供を求めたが校長は學業に支障ありと拒絶し、一旦引揚げたが間もなく引返し半強制的に唱歌室を明け渡させ酒食の配給を受け休養してゐたが二十九日午前一時半ごろ退出した

▽……△

その他官廳は二十六、七兩日は大體平常通り事務を執つたが、裁判所では關係人で出頭せぬ者多く二十六日から半休の狀態となり二十八日は遂に交通遮斷區域內に入つてしまつたのでやむなく司法省と共に市ヶ谷刑務所に立ち退き民事刑事を通じ職權をもつて裁判期日を延期した、また鐵道省でも二十八日正午ごろ事態逼迫とともに上野驛に移轉準備をしたが、いづれも二十九日午後事件鎭定とともに移轉もせずことなきを得た

古莊次官無事

事件から引續いて非常時陸軍の首腦の善後措置に懸命の古莊次官かねて「聲明」してゐた通り廿一日を期し部內でも有名な長い立派な鬚にチョキンと鋏を入れてたうとう別れを告げてしまつた、古莊次官はさあさつぱりしたやうな手持無沙汰のやうな兎に角變な氣持ちやと鼻の下に手をやつて淋しさう



永田町附近の略圖

噂は波紋の如く擴り 爲すを知らぬひと時

警備兵と誤り叛軍に炊出す 戒嚴令下に秩序は全し

二十六日事件突發とゝもに新聞、ラヂオの報道がなかつたので一般市民は殆ど午後にいたるまでこの起つたのも知らぬ有樣であつたが、噂は波紋の如く擴がり何れもことの餘りに重大なのになす術も知らぬ有樣であつたが次第に落ち着くと共に平靜を取戻し、麹町の一角を除くほかは案外動搖もなく麹町附近でも事情を知らぬ人々や叛軍を知らぬ人々は叛軍を警備の兵と間違へ盛んに炊出までして歡迎したなどゝいふ插話もあつて事件第一日は終つた、第二日二十七日には戒嚴令が施行され、地方から警備の兵が續々入京して文字通りの非常時風景を現出したが、これも彼の大震災當時の有樣とは全然趣を異にし專らこの機に乘じて策動せんとする不純分子、流言の取締などに力をそゝがれ戒嚴令下の帝都といふには餘りに靜かな一日であつた

しかし夜に入るとゝもに警戒は嚴重になり丸之內はもちろん各芝居小屋、淺草六區の娛樂街も午後六時ごろからどこも閉館し、銀座の百貨店も閉店を六時に切上げるなど空氣は次第に緊迫し、二十八日には丸之內、麹町は一部交通遮斷され、同日夕刻から二十九日にかけては立退きを命ぜられた區域も出來、殊に二十九日は朝來全市の交通機關が一時全く停止したため各官廳、會社、商店も休業のやむなきにいたつた、しかしなんといつても一番影響を受けたのは株式街で取引所は二十六日來立會を停止し三月十日になつて二週間振りで漸く蓋を開けるといふ有樣、また戒嚴令が布かれて以來は色々の集會、催物は殆ど中止され料亭その他客商賣には相當打擊を與へ鐵道、電車、自動車の收入も激減したことは否まれない事實であつた

親友の汚名に失望 青島中尉自刃す

夫人も白裝束で殉死

【既報】目黑區上目黑八ノ一近衞輜重兵大隊附輜重兵中尉青島健吉氏（二七）は世田谷區池尻の偕行社住宅で軍刀で割腹自殺、同きみ子夫人（二四）も武人の妻らしく白裝束に身を淨め夫のあとを追つて日本刀で咽喉を突き殉死をとげてゐたのを二月二十九日朝發見され、夫妻の遺骸は中尉の實兄府立第七中學敎諭青島清氏などに守られて三月三日郷里福岡縣三池郡高洲村高柳八八一の實家に送られた

青島中尉は士官學校第四十期生銀時計組の秀才で陸大の受驗準備中だつた、夫人は仙台市片平町六九、退役輜重兵少佐佐藤賀松氏の女、仙台第二高女卒業で昨年十月中尉の上官湯原大隊長の媒妁で嫁したものである

今回の叛亂事件に關係ある竹島繼夫歩兵中尉と青島中尉とは士官學校の同期で青島中尉が輜重科のトツプ、竹島中尉が歩兵科のトツプ、共に將來を矚目されて兄弟以上の親友だつたが、親友が叛軍に參加してゐることなどに非常に懊惱して死を決したらしく、中尉の實兄青島清氏は葛飾區金町一ノ九三九の自宅で語る

私たちの實家は非常に貧しいので士官學校以來弟の世話は私がやつて來ましたが、弟は日ごろから武士道の精神を强調して自分もこのまゝゆけば將官になれるが、自分の名譽や、榮達のため生きることは價値がないといつてゐました、二十八日夜十一時過ぎ休養命令で交代後自刃をはかつたもので、發見されたとき妻は姿を亂さぬため毛布を腰に巻き日本刀で咽喉を突き實に立派な最期でした、私宛ての遺書も「軍人の妻として來るべき日が來た」と立派に認めてありました、弟の死の原因について神經衰弱云々と一部に傳へられてゐますがそれは誤りで、弟と同期前後の叛軍の將校と皇軍同士が相擊つことは忍びない、彼らはその行爲に責任を感じて自決することを望んでゐたが、遂に叛軍の汚名を着せられたのを深く殘念に思ひ死を決意したものと存じます

青島中尉夫妻

生き心地もなく 平素とはあべこべ

鑵詰にされた 關谷警部談

午前五時半ごろだつたと思ひます叛亂軍が警視廳宿直室の前に來て私ら宿直員四人を起した、そして入口に立つてゐるので何をすることも出來ず、便所に行くのにもついて來るので一寸氣持が惡かつたです、顏も洗はず朝食も攝らずやつと午後三時ごろになると警備隊に固パンを貰つて食べました

もちろん他の部屋に宿直してゐるものと聯絡を取ることも出來ず、外でどんなことが起つてゐるのかも少しもわかりませんでした、夜十時ごろ初めて留置人の食べる辨當を與へられた時は本當に嬉しかつたです、私達のやうに手の付けない辨當を食べたものはよい方で、中には留置人の食べ殘しを貰つて食べてゐたものもあつたやうです

まるでどうなることやら生きた氣持ちはしませんでしたが、二十七日朝引揚げるのだと兵隊からいはれたときは本當にホツと蘇生したやうな氣持ちでした

【上】日本劇場の避難者【下】休業した淺草映畫街

新婚十數日目に參加

坂井元中尉

齋藤內府邸襲擊の指揮者坂井直元中尉は三重縣三重郡櫻村退役陸軍少將坂井兵吉氏の次男、昭和七年十月二十五日少尉任官と同時に歩兵第三聯隊附となり同九年十月二十日中尉に昇進したものであるが、事件直前の二月九日歸郷して結婚式を擧げたばかりで父兵吉氏がその新妻をみるため上京中今回の事件に參加したもので、兵吉氏は直元中尉の歸順を勸めるため探し歩き遂に會へず新妻とゝもに嘆き悲しんでゐる

負傷の後 自刃した

河野元航空兵大尉

今回の叛亂事件に湯河原で前內府牧野伸顯伯襲擊に際し負傷し東京第一衞戍病院熱海分院に入院中自殺をとげた元航空兵大尉河野壽（二九）は熊本縣飽託郡花園村六八六河野旭氏の實弟で昭和三年十月二十六日砲兵少尉昭和九年十月十日航空兵科に轉じ第二十七期操縱學生として所澤飛行學校を卒業〇〇飛行聯隊附となり昨年八月一日航空兵大尉に昇進同年十月第五十七期操縱科學生として再び所澤飛行學校に戻り操縱訓練中今回の事件に連坐したもので所澤町御幸町北條ふく方に下宿し未だ獨身であつた

銀行の對策

二十六日朝銀行方面では叛軍の襲擊を恐れ同時に「世情に怯えた一般預金者の取付があるかも知れない」危惧から日本銀行では直に憲兵、警官に嚴重な警戒を依頼すると同時に表玄關に鐵柵を架設、萬一の場合は非常ベルを押して銀行內部に知らしめ事前に金庫その他の用意をする手筈を整へた、一方各銀行では日本銀行より約四億圓の非常貸出を求め各地方の支店に送金、一般預金者の引出に備へるなど非常に緊張してゐたが漸次事變の內容も判明、鎭靜に向つて來たので全部まとめて日本銀行に返納したとのことである

監視の目を盜み 外部に訴へる苦心

警視廳交換孃の奮闘

事件當日警視廳にあつて宿直の交換手十二名を指揮しその職を全うした交換手組長代理田中すゑさん（二〇）が自宅で語つたその日の模樣は次のやうなものだつた

二十六日早朝五時十分警視廳一帶の交換室に「警視廳の外部はすでに交通遮斷された、どんなことがあつても職場を頼む」との傳令が飛んだ、休憩員も動員され、交換手十二名が堅い決心でピタリと交換台に向ひ石田さん一人が立つて巡廻した、六時ごろ不氣味な靜けさを破つて交換手の背後にチラリと人の姿が並んだ、この日の監督の大任を帶びてゐる石田さんが事態急迫を知つて「しつかりしませうね」と交換台に向つてゐる彼女達の背を叩いて廻る頃廳內外から事態を憂慮する問合せが頻りで各警察と聯絡する直通電話が善後處置を聞いて來る、交換手にはこの通話の中繼に當つて餘計な一語も漏らすことを許されない「ハイ」「何番へ」「お話中」の許される三つの言葉だけで彼女達は出來るだけ事情を外部の「耳」に愬へようと苦しんだ、數時間が經つても食事は出來ない、わづかに許されて便所に立つても時間が長いと監視される、二、三日前から風邪に惱んでゐた新井よし子さんのことが氣になつた、石田さんはやつと一杯の砂糖水を與へることが出來たが、新井さんは監視の眼を盜み小聲で「大丈夫」と石田さんに囁き、この長時間の不氣味な對立が漸く同夜六時に解かれ文書課長官舍に待機し他の交換手との交代が許されたのだつた、總監督佐伯八重子さん（二四）以下十五人がさらに翌朝までこの苦しみを味はふだらうと思ふと一同は

眼頭が熱くなつたさうである、石田さんは昭和四年青山電話局から警視廳へ入つた人で實兄石田源次郎氏の營む目黑區中目黑四ノ一四二九石田鐵工場から通勤してゐるが「私共は平素からあのやうな場合に處する非常訓練を受けて居りますので色を失ふやうな見苦しい態度をした人は一人も居りませんでした」

小栗前總監談

二十六日午前五時頃だつたと思ふ、本廳から書生に電話で重大事を知らせて來た、直ちにその眞相を調査せしめようと思つてゐるところへ警務部長や警備課

閉ぢ籠められた警視廳交換台

驚いたは留置人 缺食で大騷ぎ

廳首腦部聯絡に苦心

事件とともに警視廳小栗總監以下首腦部は神田錦町署を假本部と定め午前六時過ぎ矢野官房主事、本間警務部長、高野刑事部長など全首腦部の參集を待つて對策を協議した結果、本部はそのまゝとして一般治安の確保に任ずる方針を定め管下各署に打電して全員を召集待機せしめ

さらに特高部は四谷署、官房は表町署、刑事は愛宕署、保安は築地署、衞生は細菌檢査所、消防は神田消防署といつた工合に分割本部を設け漸く安全なるを得た、警視廳交換台を通じて相互に聯絡をとつた

ところでひどいことになつたのは廳內の留置人である、朝來全く食事を給されぬので騷ぎ出し、この朝午前八時來重圍を潛つて廳內に入つてゐた岡崎特別警備隊長らの願ひで漸く辨當の差入れを許された、また「新撰組」をはじめ鑵詰の廳員一同も同夜某々二辯護士の斡旋で辨當にありつき蘇生の思ひをした

廿八日夜七時留置人は象潟署に移し岡崎特別警備隊長以下七名のみが廳內に殘留し各出入口を固く閉ぢて二十九日無事歸順の報あるまでを經過した

しかしこの三日間に四谷署の特高部が豫防檢擧した右翼往意人物は百八十名に上り刑事部では强盜一同未遂一を扱ひ衞生部は十一班の救護班を設け消防部は十四台の消防自動車、五台の急救自動車を用意して各その任務遂行を期した

憲兵の活躍

今次の事變で帝都警備の第一線に立つて活躍したのは憲兵である、全國から召集された憲兵は七百名これに近歩一、二聯隊から動員された四百名の補助憲兵を加へて一千二、三百名が各持ち場持ち場に配置された、この中には

死線を越えた 殊勳者や美談の主人公として賞讃されてゐる人も多い

つい司令部と隣り合せた詰所（アパート式官舍）の人々は事變突發と同時に飛出したきりまる十五日間壁一重のわが家にも歸れず、愛兒の顏を見ることも出來ないのはもちろん中には病妻を派出婦に委せたまゝお湯にも入れず毎日むづ痒い身體を床上に橫たへてピストルを枕に僅かに眠りをとり第一線に出動してゐた人もあれば

岩佐憲兵司令官の如きは事變發生約一ヶ月前からほとんど半身不隨といふ狀態で休暇を得て朝はマッサージ、午後は醫師の手當で暮してゐたが事變突發以來といふものはこれまた部下と同樣

痛々しい姿を 二階司令官室に運んで菊地高級副官の介添へをうけて部下を指揮してゐたといふ感激の場面もある

また第一線の指揮官となつて活躍してゐた某憲兵中尉は父親の死の報告をうけても歸らず、公事と私事は辨へてゐると頑としてすゝめを退けたといはれる

外部の情報も 蒐集出來ず

困りぬいた內務省

全國六萬五千の警察官の總元締—內務省も二十六日拂曉叛軍に完全に交通を遮斷された、この急變に山崎人事、兒玉會計、長谷川文書の各課長らは午前七時ごろ相前後して內務省に驅けつけた、前夜の宿直員、守衞、小使、電話係二十數名がどうなることかと不安に怯えてゐたが幹部達の登廳でホツと一息ついた、しかしそれも束の間で同七時半ごろにいたり

叛軍のために 登廳した廳員その他は悉く追返されてしまつた

そこで內務省では取敢へず愛宕署裏側の巡査敎習所に假りの內務省を新設し一方唐澤警保局長、相川保安課長らは下谷上野署に本部を設けて警視廳と內務省の聯絡にあたつた巡査敎習所に移轉した假設內務省は今迄總ての機關が完備してゐる本廳で仕事をしてゐただけに移つては全く手も足も出ず、公衆、警察兩電話の增設その他につとめたが事件が事件である關係から情報はなかなか蒐集出來ず、地方警察部との聯絡も巧く行かず頗る面喰つた

一方內務省に 鑵詰めになつた山崎、長谷川、兒玉各課長はそのまゝ廳內にゐるわけに行かず、といつて全部が脫出して內務省を空家にすることも出來ぬので相談の結果會計課長は建物の管理者であるといふので兒玉課長が守衞その他と共に居殘ることゝし山崎人事、長谷川文書兩課長らは「書類を燒はしてくれ」と叛軍にことわつて不安の本廳を脫出し假設內務省にかけつけた

しかし二十七日晝過ぎにいたり叛軍が內務省を引揚げたので赤木次官以下廳員は憂色晴れて一日半振りに本廳に歸り互ひに無事なるを喜んだが間もなく內務省地帶の危險信號が發せられ夕刻またまた兒玉課長が居殘つて赤木次官以下全員は假設內務省に引返した

二十八日は後藤內相が宮內省に詰め切つてゐるため同所にも內務省出張所を設けて警視廳をはじめ全國警察部と聯絡し治安の維持に努めたが、二十九日午後全く叛徒が鎭定したので、內務省もやうやく本廳に落着くことが出來た

恩人討伐の苦衷 岡澤軍曹自殺す

赤坂一聯隊の模範兵

岡澤軍曹

叛亂軍の兵士が續々歸順しはじめた二十九日午前十時ごろ麻布區市兵衞町二の三六井戸掘業長谷川愛吉さん方の表土間から突然一發の鋭い銃聲が響いた、驚いた家人や近隣の人々が驅つけて見ると手にピストルを握つた下士官が紅に染つて倒れてをり、彈丸は咽喉から後頭部を貫いてすでに息は絕えてゐた

前後の事情から同下士は人氣のないのを見すまし長谷川さん方表口をそつと開いて土間に入つた上ピストルで覺悟の自殺を遂げたものと推定された、軍服の襟章はあらかじめもぎ取られ上着裏のネームもなく取敢ず遺骸は身許不明のまゝ赤坂一聯隊の營舍に運び込まれ

同聯隊の調査により右は同聯隊の炊事係り岡澤[illegible]吉軍曹（[illegible]）と判明した

同軍曹はかつて叛軍中の香田大尉から下士官敎育を受けたことがあるため同日叛亂軍鎭壓のため部下を率ゐて六本木まで出動しながらもかつて恩師として敬慕した上官との間の立場に窮し遂に悲壯な自決を遂げたものと判明した

同軍曹の軍服內ポケツトには報告用紙に萬年筆で認められた遺書があり

もう最後になるかもしれぬ、母に思ふやう孝養を盡せないのが遺憾と思ふ、自分の目的は一部達せり、たゞ誠あるのみ

と記してあつた、岡澤軍曹は即日曹長に昇進、去る三日の葬儀には一聯隊から聯隊長代理[illegible]少佐らが參列した

同軍曹は昭和四年入營、本年士官學校本科に入學することになつてをり同軍曹の品川區大井伊藤町五六四八の自宅には母まつさん（[illegible]）兄由太郎君（[illegible]）弟輝雄君（[illegible]）一政君（[illegible]）妹うたさん（[illegible]）ふゆさん（[illegible]）らの家族がある、なほ同家は一家から三人の軍人を出した名譽の家として昨年區役所から表狀を授與されたことがある

和やかに語合ふ その夜の廳員と叛亂兵

岡崎警備隊長に電話で聞く

二月二十六日夜十時四十分、警視廳宿舍內に隊員とともに鑵詰となつてゐる岡崎特別警備隊長を電話で呼び出して左の如き話を得た

食糧は軍の方で配給してくれ昨夜（二十五日）の宿直員合計二百名とも全部元氣です、機關銃を十數挺据ゑたつて？世間で心配する程差迫つた狀態ではなく割合和やかにいろいろ話合つてゐます、歸れないので心配するでせうが今の狀態では決して心配する程のことは本當にありません、こんな狀態が永く續いては困りますが、いろいろ交渉中なので割合早くこの警戒も解けるものと思ひます、電話の交換孃その他それぞれの場所に就いて仕事をする、すぐうしろに勿論警戒してゐますがなんでもありません、風呂に入つてゐるやうなものだつて？まさかそんな工合でもないが食糧は行屆いてゐますし、今のところ心配ありません、御安心下さい

野中老少將 死の對面

我子の最期に僅に慰む

故野中四郎元大尉の嚴父退役陸軍少將野中勝明氏（[illegible]）は中野區江古田四の自邸で謹愼の生活を送つてゐるが、同少將は事件發生後自宅にあつて毎日ラヂオで刻々アナウンスされる情報に一刻も早く四郎大尉の自決を待つてゐたといはれる、少將は二月二十八日險惡なる情勢にたまりかねて戒嚴司令部を訪ね息子四郎大尉の自決を迫るべく面會を申出たが遂せられず、二十九日朝いよいよ叛軍として武力鎭壓されるとの報に悲壯な決意をして老軀を軍服に固め午後二時ごろ再び戒嚴司令部を訪ねてどうあつても面談のうへ自分の決意を傳へたいと申出たが、この時すでに叛亂軍歸順せりの情報あり、野中少將はただ一言「野中は生きて歸順したのですか」と問ひ司令部側より暗に大尉が自決した旨の答へに漸く老少將は安堵の色を現はして歸宅した、翌三月一日早朝聯隊に遺骸引取りに行き、初めて四郎大尉と死の對面をしたが、わが子の武人としての最期を遂げたのをわづかに慰めとし

陛下の宸襟を惱まし奉つた今回の擧は全く恐懼の極みに存ずる、皇軍互ひに兵火を交へるやうな場合が生じたのである、なんと自分はお詫びが出來ようか、不肖の子四郎の自決は當然至極で自分も責の一端が果されたやうな氣がした、今はひたすらお詫び謹愼中であるから多くは話したくない、昨年末四郎が軍刀に適るからとて傳家の寶刀助定を持つて行つたがそれを帶びてをつた、すでにそのころから決意してゐたものとみられる、あれは兄弟中でも一番寡默な方だつたがそれだけに憶ひ出は深い、しかしこんなことは私事である、自分が四郎に會ひたかつたのは一彈も交へさせてはならぬ、一刻も早く自決させることをいひたい一心であつた

家には鑿子夫人（[illegible]）日本ビール會社々員三郎氏夫妻にお孫さん三人の暮しである